

# 飯綱平遺跡

— 発掘調査報告書 —

1994

豊田村教育委員会

# 飯綱平遺跡

— 発掘調査報告書 —

1994

豊田村教育委員会

## 序 文

飯綱平遺跡は、長野県下木内郡豊田村替佐に所在する遺跡です。村ではこの台地上に村勢発展のため住宅団地造成を計画し、ここが周知の埋蔵文化財包蔵地のため、平成4（1992）年8月から発掘調査を開始し、以後整理作業を継続してきましたが、本書は、その成果をまとめた報告書であります。

内容は、この台地にも各時代にわたって人が住んだ痕跡が見られること、とくに平安時代中期の1号住居址は遺物も豊富で、この台地周辺の中核的な住居址と考えられます。この地域の当該時期の研究の指標となりましょう。

本村も高速交通網建設の時期を迎えて開発事業の増加が考えられます。これに対処する埋蔵文化財対策はさけて通れない問題です。炎天下の発掘作業や地道な作業の遺物の整理、製図などに真摯に参加とご協力をいただいた、調査団と作業員の皆さんに心から感謝申しあげて、本書の刊行のあいさつといたします。

平成6年3月20日

豊田村教育長

丸山智信

## 例　　言

- 1 本報告書は、長野県下水内郡豊田村替佐に所在する、飯綱平遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、住宅団地造成に伴うもので、豊田村企画課と、豊田村教育委員会の委託契約により、豊田村教育委員会が調査主体となり、調査団を組織して、1992（平成4）年に行った。以後、整理作業は2ヶ年にわたって、中野市歴史民俗資料館で行った。
- 3 調査団の構成は別記してある。
- 4 本報告書作成のため、遺物復原・遺物実測図・表・トレース作業は、池田実男・湯本栄一・檀原みち江・池田正子・樋口義政・山崎のり子が行った。
- 5 写真撮影、原稿執筆、編集は檀原長則がおこなった。
- 6 出土遺物、実測図等は、豊田村教育委員会が保管している。

# 目 次

## 序

## 例 言

第Ⅰ章 発掘調査の経過.....	1
第一節 発掘調査に至るまでの経過.....	1
第二節 調査日誌.....	4
第三節 調査団の編成.....	6
第Ⅱ章 調査地周辺の環境.....	7
第一節 遺跡の立地と歴史的環境.....	7
第二節 層 序.....	8
第Ⅲ章 調査の経過.....	11
第一節 遺構.....	11
第二節 遺物.....	18
第Ⅳ章 考 察.....	25
第一節 1号住出土の土器について.....	25
第二節 まとめ.....	25

# 挿 図 目 次

第1図 飯綱平遺跡位置図.....	2
第2図 豊田村遺跡分布図.....	3
第3図 飯綱平遺跡試掘坑位置図.....	5
第4図 飯綱平遺跡調査全体図.....	9・10
第5図 1号住遺構・遺物検出図(1).....	11
第6図 1号住遺構・遺物検出図(2).....	12
第7図 1号住の柱穴など実測図.....	12
第8図 2号住遺構実測図.....	13
第9図 3号住遺構実測図(1).....	14
第10図 3号住遺構実測図(2).....	15
第11図 3号住柱穴・炉址実測図.....	16
第12図 1号調査地点と焼石土坑.....	16
第13図 焼石土坑実測図.....	17

第14図	5号調査地点実測図	18
第15図	1号住出土遺物実測図(1)	19
第16図	1号住出土遺物実測図(2)	20
第17図	1号住出土遺物拓影図	22
第18図	1号住出土遺物実測図(3)	24

## 表 目 次

第1表	飯綱平遺跡1号住出土土器(実測図)観察表	21
第2表	飯綱平遺跡1号住出土土器観察表	22
第3表	石製品・鉄製品計測表	22
第4表	飯綱平遺跡1号住出土の土器構成	25
第5表	飯綱平遺跡1号住出土の器形別土器器破片数	25

## 写 真 目 次

1 北から遺跡を望む	11 南から見た3号住の炉
2 太型蛤刃石斧の出土	12 南から見た焼石土坑
3 北から見た1号住	13 1号住出土須恵器四耳壺
4 1号住東の土器	14 同灰釉長頸壺・碗破片
5 やりかんなの出土	15 同須恵器壺・高台付壺・未完了焼成壺
6 南から見た1号住	16 1号住出土土師器壺
7 南から見た1号住	17 同大型蛤刃石斧
8 南から見た2号住	18 同やりかんな
9 南から見た3号住	19 同軽石製品
10 北から見た3号住	

# 第Ⅰ章 発掘調査の経過

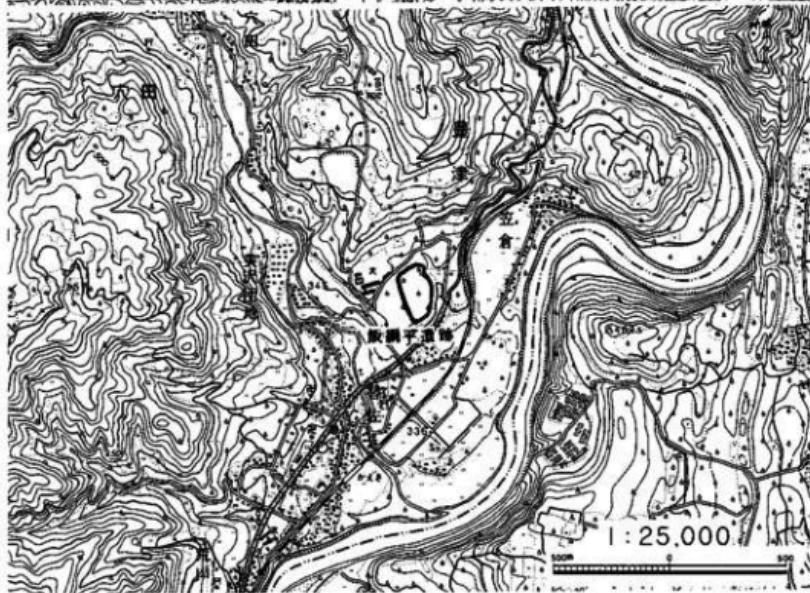
## 第一節 発掘調査に至るまでの経過

豊田村は上今井地区などを除いて山間の地域が多く、旧永田地区などは斑尾山の南麓に位置し、標高もあり積雪寒冷地のため過疎地となり、集落が全戸をあげて、村の中心部に移転した例もある。このような関係から人口の村外流出を防ぎ、さらに外から誘致して、村の発展を図るために、住宅団地の建設が、村の重要施策として、取り上げられている。これを進めるには道路網の整備が必要で、高速道の建設と、関連する道路の整備が村内、隣接する中野市以南の地区などで、現在具体的に実現しつつある。

このようなことから豊田中学校所在地東の台地（農地・大半果樹栽培地）が、住宅団地の候補地としてあげられ、第一次計画として、約50戸の宅地造成が計画されたのである。しかしここは周知の埋蔵文化財の包蔵地として知られ、「長野県史考古資料編」遺跡地名表にも「飯綱平遺跡・立地台地・時代縄文・遺物中期土器・磨石斧」として登録されている。

以上の結果をふまえて1992（平成4）年7月16日受託者の豊田村教育委員会の招集で、県教委文化課の小池・春日指導主事の出席を得て、原因者の村企画課（住宅公社）、教育委員会の協議により、この遺跡の埋蔵文化財の保護協議をおこなった。この結果調査責任者として檀原長則があり、発掘調査により記録保存を図ることになった。

具体的には該当面積3500m<sup>2</sup>に、トレーニ方式の試掘調査を行い、遺構を確認して、再度積算協議し、学生の夏休み期間を利用して本発掘を行い、報告書の作成は次年度以降に行うことになった。



第1図 織綱平遺跡位置図

# 豊田村遺跡分布図

番号	地名
1	馬頭遺跡
2	南大河遺跡
3	山根遺跡
4	中根遺跡
5	北根遺跡
6	道根遺跡
7	高根遺跡
8	南大河遺跡
9	今井遺跡
10	寺原遺跡
11	南山遺跡
12	南山遺跡
13	北山遺跡
14	川久保遺跡
15	曾坪遺跡
16	御所平遺跡
17	御所平北遺跡
18	光寺遺跡
19	御曾島遺跡
20	御久保遺跡
21	大名原遺跡
22	大曾根遺跡
23	八号墳遺跡
24	御戸遺跡
25	北山丘陵遺跡
26	御原遺跡
27	水上遺跡
28	御伊勢
29	御舟
30	御内遺跡
31	月吉遺跡
32	御原遺跡
33	御山遺跡
34	御山平遺跡
35	大塚遺跡
36	御山遺跡



## 第二節 調査日誌

### 試掘調査

1992（平成4）年6月10・11日（第3回）

大形のバックホーに、先端が幅1.4mの平面掘削部品をつけて試掘調査を中学校側から行う。北に緩く傾斜している畑で、傾向としては、台地の中心に向かって黒土層が薄く、周辺は厚い傾向にあった。

所々に古い畑の境界（畑の区画）の溝が見られ、小石を埋めた暗渠とみられるものがあった。幅4～5mの黒色土の落ち込みを住居址の可能性ありとして、3箇所みられた。黒色土が厚く平安時代の黒色土器などがみられたA地点は、全面に広げて調査する必要が認められた。

焼けた礫が埋まっていた穴などがあったが、この試掘では縄文時代の遺構・遺物は発見できず、調査区以外での存在が考えられた。結果として平安時代の遺構・遺物がおもな調査項目と認められた。

### 発掘調査

7月28日 大形バックホーでA地点の表土を除去する。

29日 表土剥ぎ続行、B地点、C地点の住居址の存在の可能性の周囲を拡張する。

8月4日 作業員を確保し、A地点を削平して掘り下げる。この東側の高い部分から直径1mの焼石のつまつた焼土坑があり、そばに横円押型文の土器片があった。

5日 A地点に縦横のトレンチをいれて掘り下げる。黒色土器など数点あったのみ。

6日 B地点の1号住居址プラン確認掘り下げる。A地点は遺構確認できず。焼石土坑掘り下げ。

7日 1号住居址は平安時代の土器・須恵器など多数あり、焼土の部分も広がる。

10日 1号住実測。2号住居址掘り下げ、1辺3.8m、実測も行う。

11日 C地点の2号住床面まで掘り下げる。中央に長方形の炉あり。

18日 2号住のベルトを削り、炉を掘る。長方形の炉で底に炭・獸骨片厚さ2cmあり。

19日 D地点にトレンチをいれる。黒曜石剝片4点発見。

20日 1号住ベルトを削り、写真、実測、掘り下げる。須恵器四耳壺破片あり。

24日 1号住写真、東部分掘り下げ、焼け石土坑（炉）実測。

26日 1号住東部分から黒色土器・灰釉・須恵器など多数検出、清掃と写真、実測。

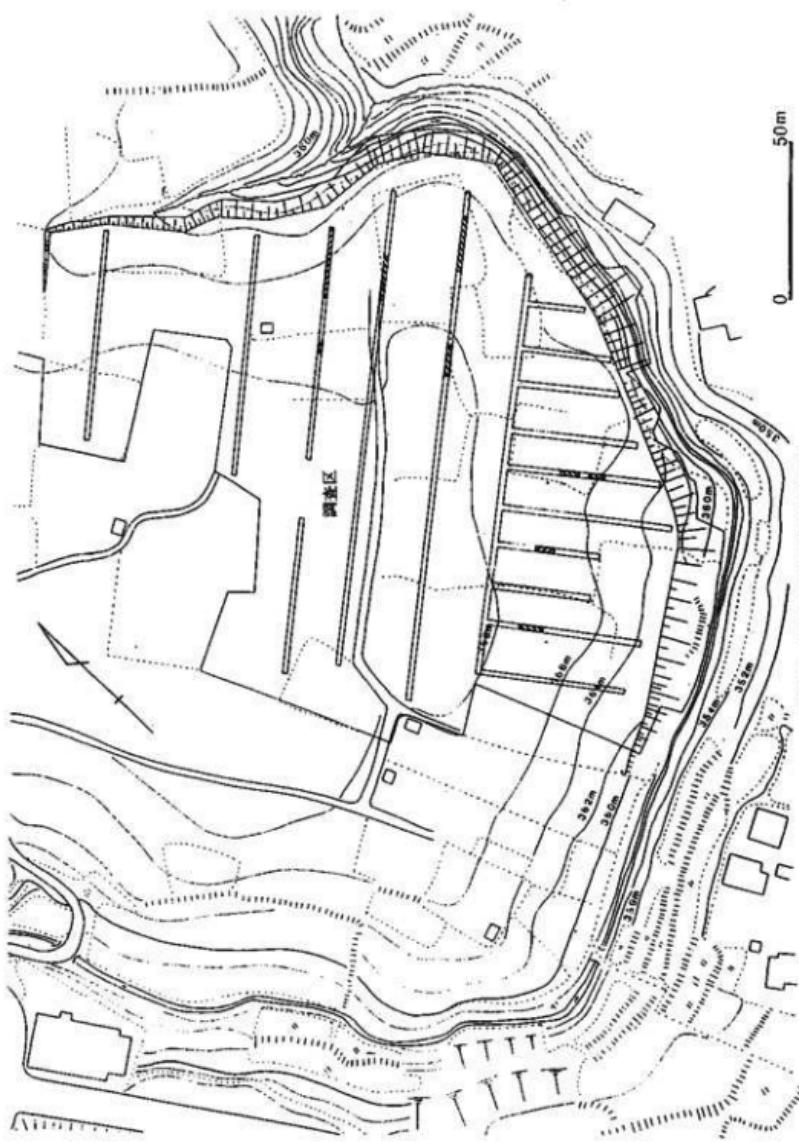
27日 1号住写真、実測。焼け石土坑掘り下げ。5号地点の黒曜石出土地点掘り下げ。

28日 2号住出土遺物、土器の小破片1、写真。5号地点掘り下げ。

11月22日 遺構測量を行う。現地の調査終了。

平成5・6（1993・4）両年の1月～3月にかけて、中野市歴史民俗資料館で、遺物の整理作業、実測図整理、トレース作業、原稿執筆を行う。

第3図 板鋼平重跡試掘坑位置図



### 第三節 調査団の編成

調査責任者 丸山智信 豊田村教育長  
調査団長 榎原長則 日本考古学協会員  
調査員 池田実男 長野県考古学会員  
事務局 永島永久 豊田村教育委員会社会教育係長  
発掘作業参加者  
松野美寿枝 中島農式繁 小林よし代 中島よしの 金子甲  
遠山テルヨ 宮島とく 田中九平 神田長賢 高橋清一  
外谷靖 畠山周作 土屋齊晃 湯本栄一 橋口義政  
常田誠 池田正子 池田きよ子 榎原みち江  
整理作業参加者  
湯本栄一 橋口義政 池田正子 池田きよ子 榎原みち江  
山崎のり子

## 第Ⅱ章 調査地周辺の環境

### 第一節 遺跡の立地と歴史的環境

長野盆地（善光寺平）を北流した千曲川は、中野市立ヶ花に至るや、河岸段丘のなかに流入する。これは右岸の高丘・長丘丘陵と、同じ地質の左岸の洪積層の山地、豊田村の米山・奥手山丘陵の間を蛇行して流れ、低平部では、沖積層が堆積している。

これは千曲川がこの丘陵の間を先行して流路をとり、この地域の隆起にたいして下刻作用を行った結果である。そして屈曲部では、急崖をなしている部分がみられる（『豊田村村誌』・『中野市誌自然編』）。

豊田村の千曲川に面した丘陵性の山塊のうち、南は米山山塊（丘陵）と呼ばれ、最高所は611mである。この北の替佐の盆地（千曲川沿岸部）と斑尾川を隔てて、奥手山塊（丘陵）があり、最高所は500mである。これらの二つの山塊は、西方では丘頂面が、平坦または、緩傾斜で、耕地化されているところがある。また奥手山丘陵、長丘丘陵は、上部に平坦面が多く残り、侵食の進んでいない丘陵といわれている。飯綱平遺跡は、この米山丘陵の南端にあり、東方下段の替佐の平坦面から30数m高い平坦面をなし、東西500m、南北約900mの広さで、豊田村中学校が西方に位置し、浅い谷を隔てた北側にも平坦面が存在する。

この平坦面は主としてリンゴ・ブドウなどの果樹栽培地で、調査地はこの北半分の宅地造成地であった。こここの平坦面は、北及び東に緩やかに傾斜し、平坦面の北東から東にかけては急崖をなし、中辺に蓮用水堰が巡っている。

ここは北に米山の丘陵の山を負い、東北の高社山から志賀高原の山々、さらに菅平方面の山のみまで見渡せ、眼下には千曲川の流れが光り、長野盆地北部が見渡せる景勝の地である。

昭和56（1981）年発刊の『長野県史考古資料編』には、《豊田村飯綱平遺跡・豊津・替佐・飯綱平・台地・縄文中期土器・磨石斧》と記載され、縄文時代の遺跡とされている。

前に述べたごとく、まだ未調査区が多く残されているので、出土地点の確定が必要である。

この台地は水に恵まれていないので、あまり大遺跡の存在の可能性は考えにくい。したがって中世以後も集落の存在はなく、水に乏しいため水田化もされずにきた。

このように下段の平坦面が今までの生活の歴史の舞台で、中世には加佐（かさ）郷とよばれ、替佐はその遺称である。ここは飯山に至る道と、斑尾山東麓から越後に至る道の分岐点の要衝にあたり、戦国時代には、飯山城（上杉方）に対する城として重要視されてきた、替佐城（武田方）は斑尾川を隔てた山上にあり、規模が大きく戦国末期の山城の様相を伝えている。

また北東の笠倉には、割田氏宅地に笠倉館跡が残り、ここに小領主がいたことを物語っている。

## 第二節 層序

長野県北部は新生第三紀、中新世（約三五〇〇万年前）にできたフォッサ・マグナ（糸魚川～静岡構造線）の北辺にあたっている。この中央大地溝帯は、その後の火山活動などによって、隆起をつづけ、陸化するとともに、第四紀の火山活動によって、東部山地の山々は次第に現在の姿になつた。

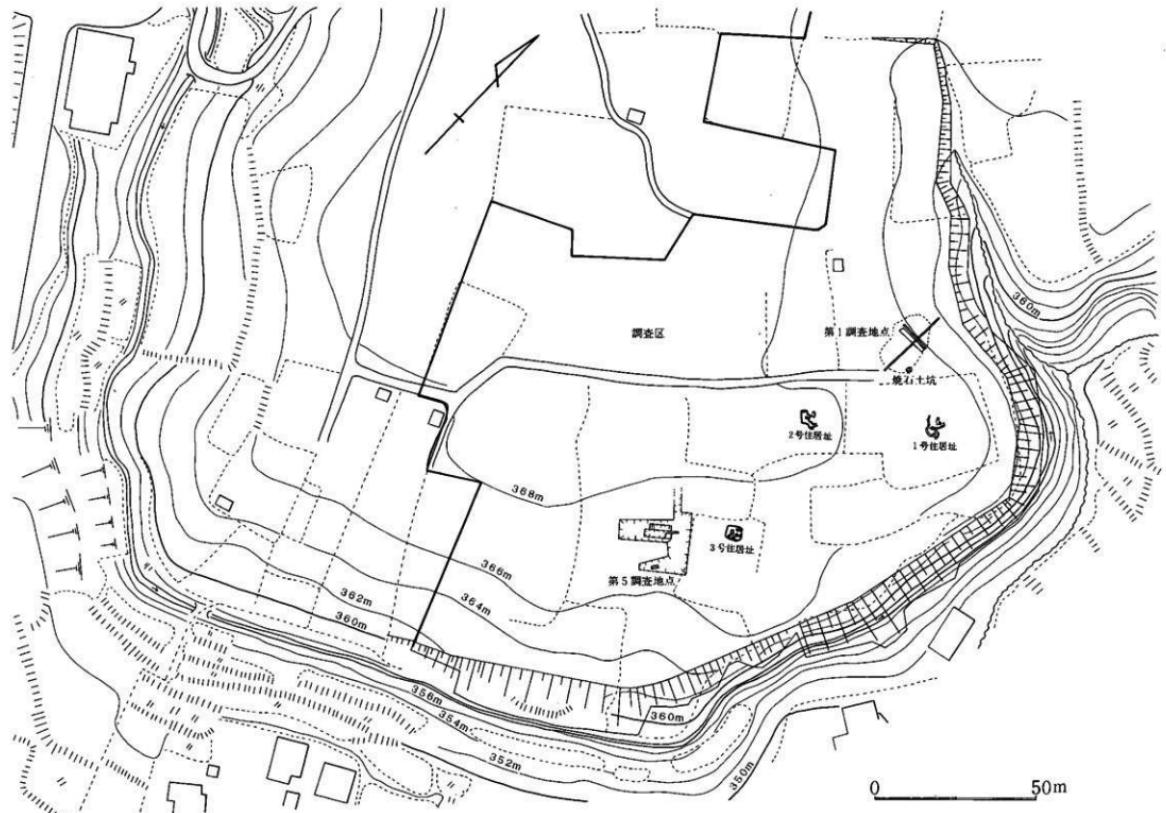
豊田村の北に聳える斑尾山（1381.8m）もその一つであって、北信五岳（斑尾・妙高・黒姫・戸隠・飯綱）の北端に位置し、これらの山に比べて、山体の侵食程度が進み、最も古く噴出した火山とみられている。さらに富士火山帯の北端の火山でもある。

このように豊田村の地質を大別すると、この第三紀層中に噴出した、旧永田村の斑尾山の1、火山岩地帯と、2、第三紀層地帯があり、旧豊井村の千曲川沿岸の3、沖積層地帯、奥手山丘陵の4、洪積台地の丘陵地帯の四つに大別される。そしてこの間に永江盆地が存在する。

このうち、第三紀層地帯がもっとも古く、堆積・陸化したところで、侵食の進んだ山地を形成し、谷と尾根が交錯する様相を呈している。

飯綱平遺跡のある奥手山丘陵は、中野市の長丘丘陵と同じ洪積層台地の地質で、海中に堆積後に隆起して、褶曲によって背斜構造となっている。またこの丘陵の畠（はざま・地名）からは巻貝の化石が、また赤坂からも化石が発見されている。

遺跡の台地は、黄色のローム層が厚く堆積し、所によつては、粗い粒子の箇所もあった。台地の周囲の低地は、表面に黒色土が厚く堆積していた。これは中心部に行くにしたがつて薄く、したがつて耕土も薄くなっていた。



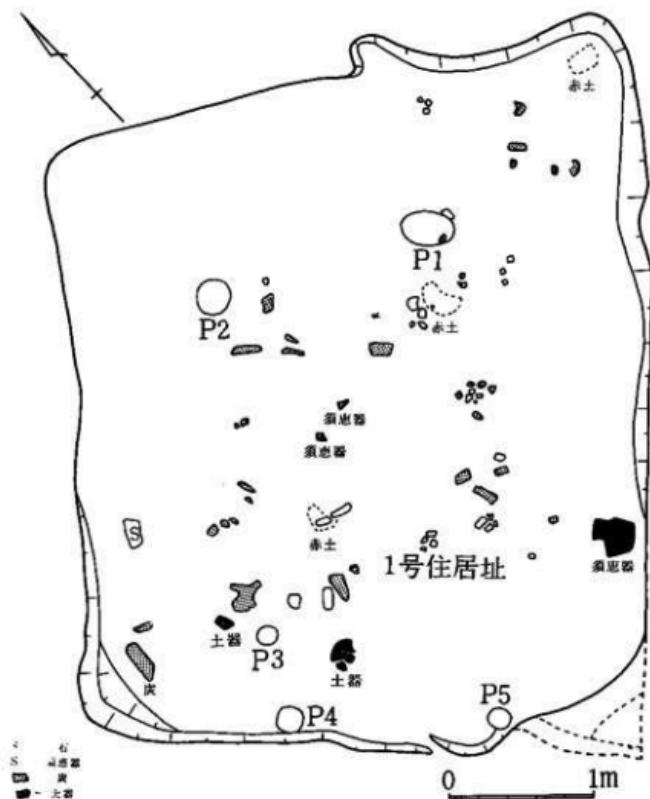
第4図 鍋綱平遺跡調査全体図

## 第III章 調査の経過

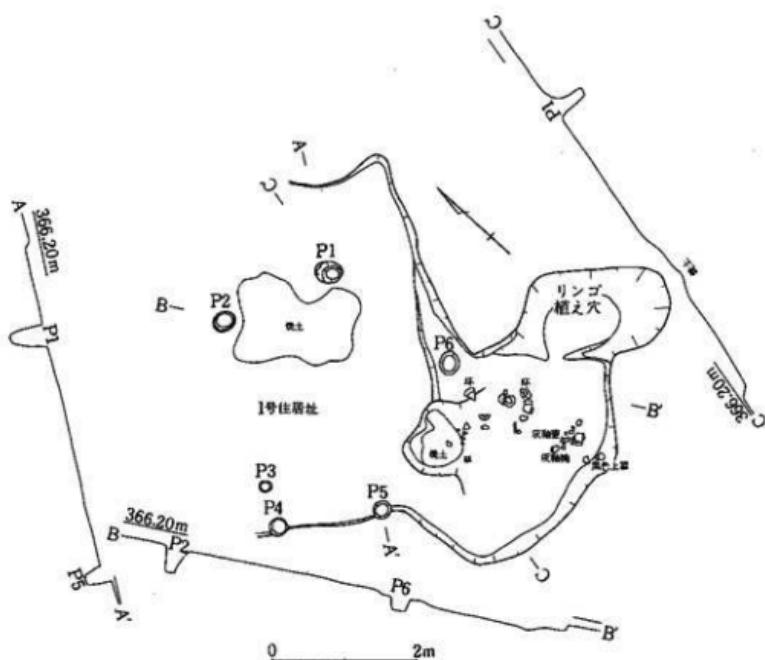
### 第一節 遺構

1 1号住居址（第5～7図） 調査区の中央北よりに検出され、地面が僅かに北に下がり、東西から見れば、高所になった位置である。覆土は浅く耕土20～30cmの所から遺構・遺物が検出された。

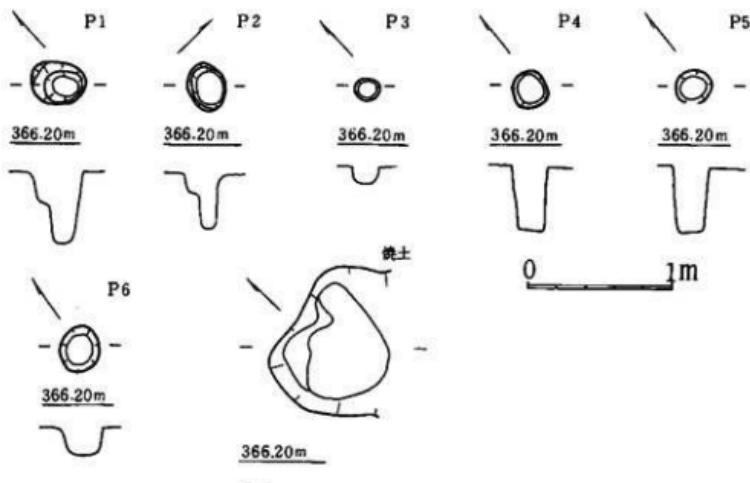
まず焼けた土が検出され、炭や土器片が現れ、焼失住居と認められた。しかしプランは判然と



第5図 1号住居構・遺物検出図(1)



第6図 1号住造構・遺物検出図(2)



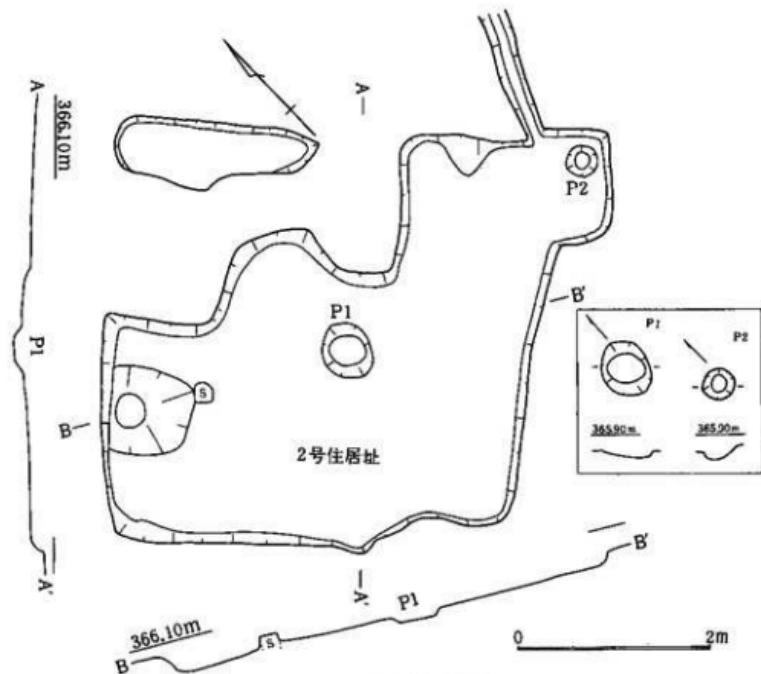
第7図 1号住柱穴など実測図

せず、焼け土や炭の在り方から追及した、北側は壁が残らず、不明確であったが、南北4m余、東西4mの方形で、南隅の焼け土部分に、カマドがあったのではないかと、推定された。

しかしこの南側などから灰釉の碗・壺、壺、黒色土器などが検出されたため、増築（作り出し）があったのか、住居址が複合しているのか、判然とせず、この北側は、果樹の植え穴で破壊されていたので、さらに確認を困難にした（第5・6図）。

ここからは敲打器に再利用された弥生時代の鉈刃石斧、軽石、やりかんなと思われる鉄器、土師器の壺・椀・高台付椀、灰釉の碗・壺、須恵器の四耳壺、その他の甕などの破片が検出されている（第15～18図）。

この住居址の當まれた年代の検討は、検出された他地域から搬入され土器の年代の検討によつて可能である。遺物の項で詳しく述べるが、ここでは須恵器の短頸の四耳壺、灰釉の高台碗などが対象となる。同型の凸帶付四耳壺は、南安曇郡豊科町菖蒲平1号窯から出土しており、平安時代II期に編年されている。また灰釉の碗の型式は、釉薬のかけかた、高台の尖りから、愛知県の猿投窯の黒笠89号窯の製品にみられるもので、現在は10世紀前半に編年されている（『長野県史考古資料編・全一巻・遺構・遺物』）。



第8図 2号住居構実測図

そして他の伴出遺物などからも推定して、この住居址の年代は、10世紀前半と推定して、大過ないと思われる。

**2 2号住居址（第8図）** 2号住居址は1号住居址の33m南に位置し、試掘によって黒色土の落ち込みが確認されたものである。しかし耕作土が浅くプランが不明確で、遺物も土師器の小破片1のみで、存在した時期の決定も困難である。一辺4mの方形の住居址と見られ、東に張り出しがある。西側に落ち込みのみられるものの、カマドの位置は、確認されず、柱穴も2基の検出にとどまっており、生活の痕跡は薄い。一時的な仮泊の住居（小屋）とも判断される。

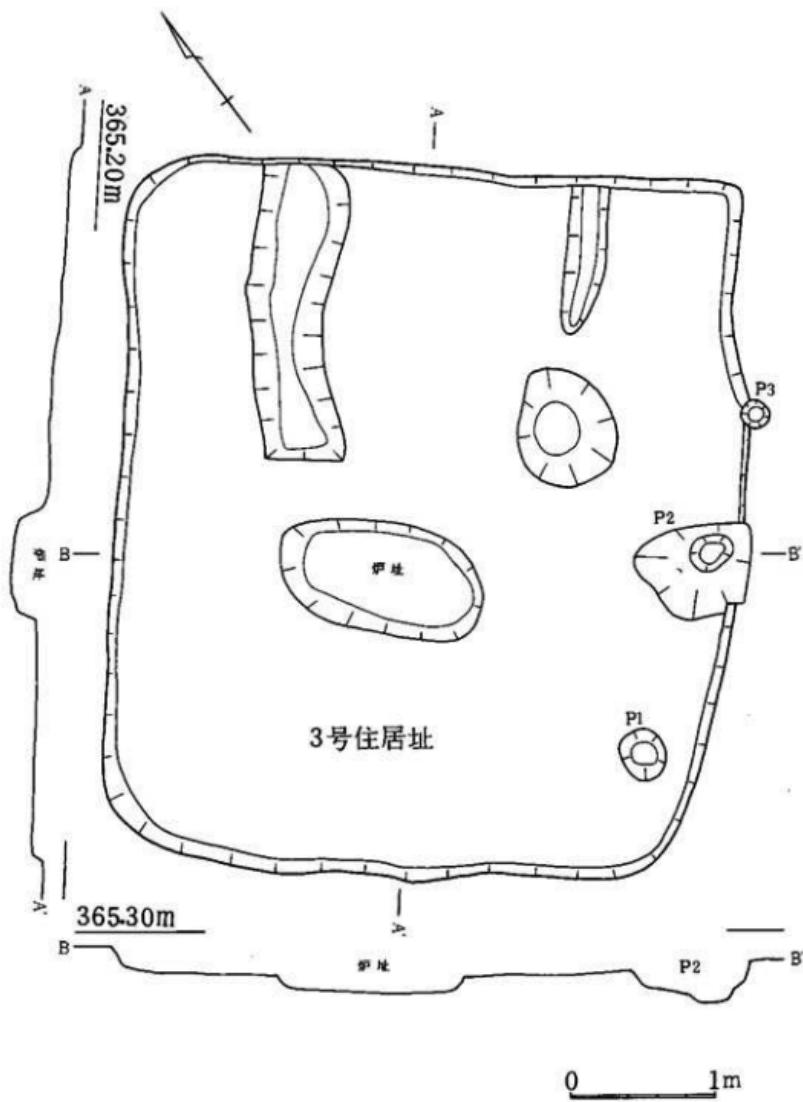
**3 3号住居址（第9～11図）** 3号住居址は、調査区の東面中央に位置して、検出された。実測図の断面は、確認面からの深さを示し、覆土は西で40cm、東で50cmであった。ここの住居址はプランがよく確認でき、東西4m、南北5m弱の規模の方形であった。

中央に長径1.4m、短径0.8m、深さ10cmのかなり大きな炉址があつて、底に灰・炭・小動物の骨などが確認され、側壁がかなり焼けていた。

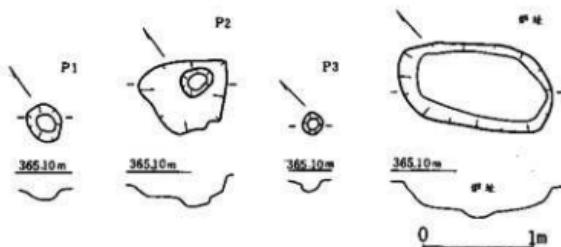
発掘時、東側に石礫が集中していたことが注意された。しかしここでも柱穴の検出が不十分で、



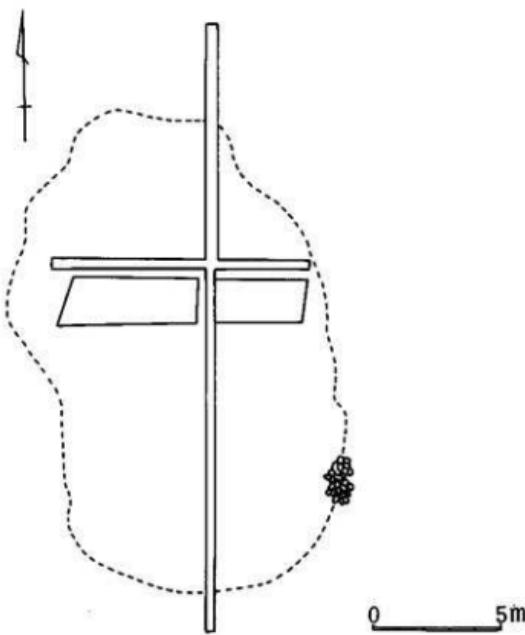
第9図 3号住居構造実測図(1)



第10図 3号住構造実測図(2)



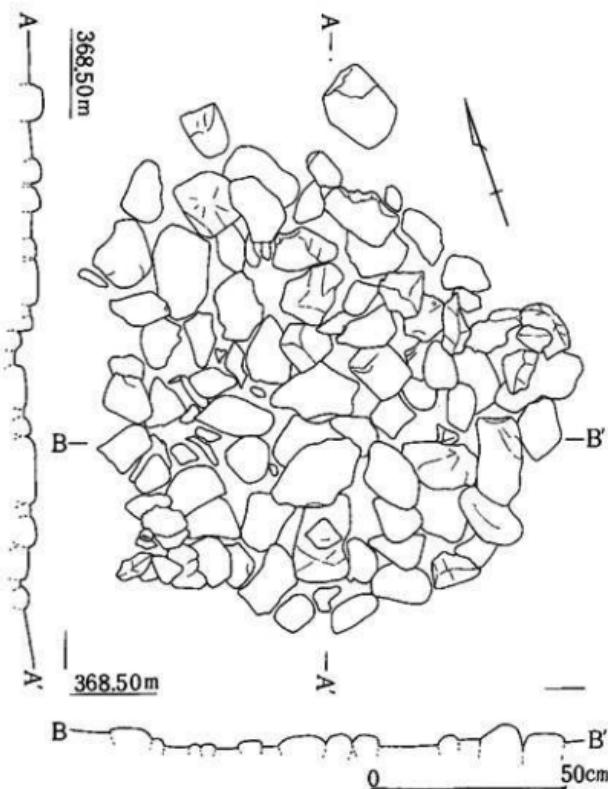
第11図 3号住柱穴・炉址実測図



第12図 1号調査地点と焼石土坑

住居の構造は不明であり、伴出遺物がみられなかったため、住居址の時期決定に齟齬をきたしている。強いていえば、中・近世の短期間の住まいと推定したい。

4 第1号調査地点と焼石土坑（第12・13図） ここは調査区の北中央に位置し、北に傾斜した所で、浅いV地形になっており、試掘では黒色土が厚くここに堆積し、土器片が見られたので、最初にグリットを作って、深くトレンチを入れた。しかし平安時代の土器片が5片ほど覆土にみられただけで、遺構は確認できなかった。

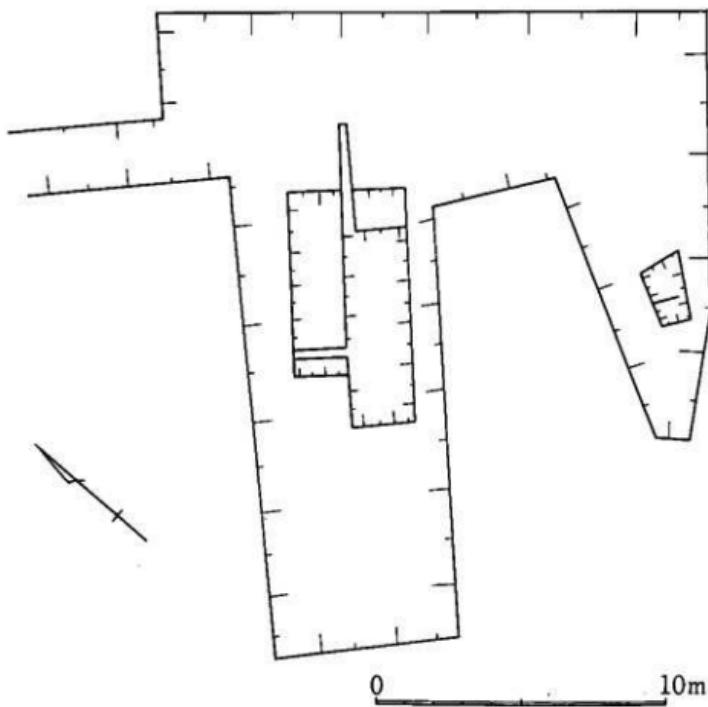


第13図 燃石土坑実測図

この東端の高くなつた所から、直径1.25mのはば円形の焼けた石の埋められた土坑が見つかつた。円礫は大で直径25cmぐらいで、中には割れたものもあった。掘り方はU字状で、深さ40cmを数え、側壁も焼けていた。そばから楕円押型文の土器片が1つ見つかっている。

思うにこれは土俗例から焼石の熱によって、食物を煮沸するに用いられた、遺構ではあるまいかと、推測し、仮泊による痕跡と、認めたのである。

5 第5号調査地点（第14図） ここは3号住居址の南に位置し、試掘では黒色土の落ち込みが見られた所である。ここを拡張して掘り下げるところ、黒曜石の剥片が2つ見つかった。検出層は黒土層と、黄色土の中間層に包含されていた。旧石器の可能性もあったが、残念ながら、保管中に紛失してしまった。



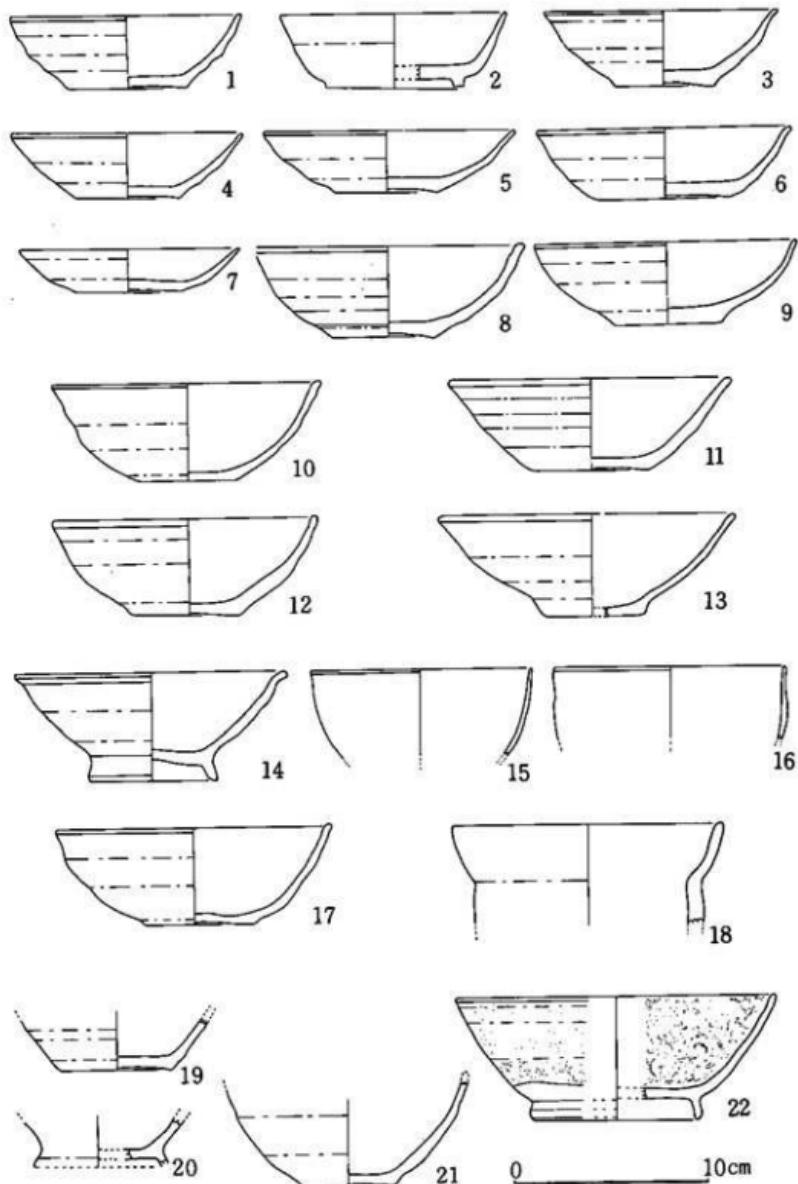
第14図 5号調査地点実測図

## 第二節 遺 物

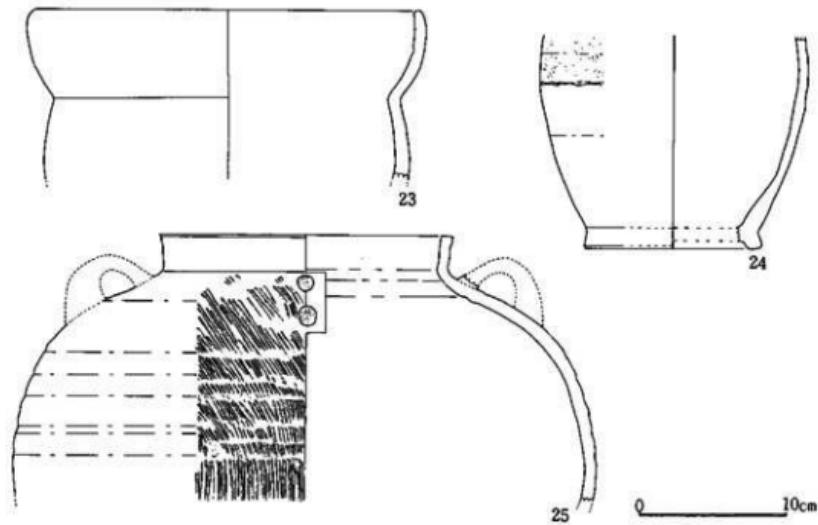
1 土師器（第15・16図・第1表）はすべて1号住居址と周辺から検出されたものを図示している。ここでは食器の壺型土器のうち、浅い器高2~3cmのものを皿と表現し、それより深いものを碗と表現した。皿（第15図3~7）は、ロクロ成型されたもので、外底部に台から切り離した、糸切り痕がみられる。胎土に鉄分粒が含まれ、中野市高丘台地で焼かれた土器に類似している。6は須恵窯の焼成中、窯の事故による、生焼け製品とてている。

碗は10個体を図示した。比較的器肉が厚く、外反してそのまま立ち上がり、口縁端部が丸くなっているものが多い。胎土に鉄分粒が含まれ、在地産と思われ、ロクロ成型、外底部に糸切り痕がある。8の内底部には、重ね焼した痕跡が残されている。

黒色土器は4個体を図示した。いずれも高台付で、口縁端部が強く外反したタイプと、直立し



第15圖 1號住出土遺物實測圖(1)



第16図 1号住出土遺物実測図(2)

たタイプがある。前者は灰釉陶器の碗の器形から影響をうけたものである。14をみると、胎土は前者と同じだが、器肉が薄く洗練されている。15は在地産とみられ、製作地と工人の特定が必要である。

斐は2個体を図示した。23は比較的器肉が厚く、鉄分粒がみられ、ロクロなでされている。口縁部のくびれから、そのまま、くの字に外反りせず、円く直立した器形が特徴で、類例の乏しいものである。

第17図3の甕破片は、胴部のもので、前者とは個体が別で、器肉は薄く、内部はロクロ成型痕がよく残り、外部は上にロクロなでと、下にはケズリが施されている。

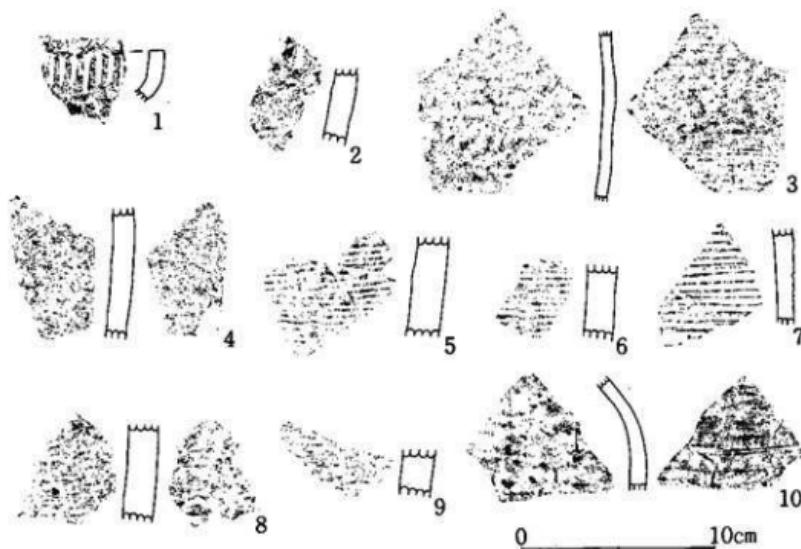
2 積惠器（第16図25・第17図4～9）は四耳壺と坏・斐が検出されている。四耳壺25は、肩部に把手が4箇所つくもので、器形は胴部が円く、口縁部が帯状にはば直立して立ち上がるタイプである。肩部には左から右へ斜め平行状に、胴部は直に敲打痕がみられ、この転換点に後にロクロなでされており、ここが凹線状になっている。内面は頸部までロクロなでされ、下部もなでられている。

焼成は堅く、青灰色を呈し、セピア色や暗青灰色した部分もあり、器面には窓体の一部が付着している。

さきにみた南安曇郡豊科町の菖蒲平1号窯出土の四耳壺は、胴部との転換点に凸帯が2条ついている。これは平安時代II期に編年されている〔長野県史考古編〕。この壺とは器形が似ている

第1表 船岡平遺跡1号住出土器観察表

番号	出土 地点	器種	器形	寸法 (cm)			色調		成形・調整	焼成・形態 の特徴	系統など	残存
				口径	底径	器高	内面	外面				
1	I出B-9	須恵器	壺	(12.0)	5.5	3.8	青灰色	青灰色	ロクロ・ナデ	還元炎、糸切	堅	1/2
2	1T-G	"	高台壺	(12.0)	6.0	3.8	"	"	"	還元炎高台付		1/3
3	1J	土師器	壺	12.1	5.0	3.9	暗褐色	暗褐色	"	酸化炎	堅	1/2
4	1J1B-2	"	"	12.4	5.5	3.4	"	"	"	"	軟	2/3
5	13-B3	表探	"	"	13.2	5.5	3.2	赤褐色	赤褐色	"	"	7/8
6	I出B-9	"	"	13.2	6.5	3.6	灰色 赤褐色	灰色 赤褐色	"	還元炎	やや軟	1/2
7	1J-1B	"	"	11.4	5.5	2.3	暗茶褐色	暗茶褐色	"	酸化炎	堅	1/3
8	1J出B-6	"	椀	14.2	5.5	4.7	茶褐色	茶褐色	"	還元炎	"	完形
9	I-西	"	"	13.7	5.7	4.3	薄黒色 黄褐色	薄灰色 茶褐色	"	"	軟	2/3
10	1J-B-A	"	"	14.0	5.0	4.8	茶褐色	茶褐色	"	"	堅	4/5
11	I出B-5	"	"	14.7	6.0	4.7	橙褐色	橙褐色	"	"	"	9/10
12	1G	"	"	13.7	5.5	5.1	"	"	"	"	やや軟	完形
13	I出B-9	"	"	(15.6)	5.4	5.3	暗橙色	暗橙色	"	"	"	2/5
14	1C	"	"	16.0	5.1	7.0	黑色	白橙色	"	"	堅	1/2
15	1B	"	"	(11.5)	-	-	"	黑色 暗橙色	"	"	"	1/10
16	1B	"	"	(12.1)	-	-	"	暗褐色	"	"	堅	1/10
17	1J出 B-9	"	"	14.5	5.7	4.7	暗橙色	赤褐色 暗褐色	"	"	やや軟	3/5
18	I出B-7	"	甌 (口縁)	(14.1)	-	-	薄白茶 褐色	薄茶黑色 茶褐色	"	"	"	- 1/10
19	I出B-9	"	椀	-	-	-	灰褐色	灰褐色	"	還元炎生焼け	堅	1/10
20	I出B-7	"	高台付	-	-	-	黑色	黃褐色	"	酸化炎	黒色土器	
21	I出B-1	"	椀	(13.0)	4.8	(6.3)	"	茶褐色	"	"	黒色土器	1/4
22	I出B-3	灰釉	椀	(16.7)	9.0	6.4	白灰色	白灰色	ロクロ 輪ハケ盛	"	"	1/5
23	I出B-7	土師器	甌	22.5	-	10.0	黃橙色	黃橙色 赤褐色	ロクロ タキ?	"	"	-
24	I出B-3	灰釉	壺	18.0	12.2	-	青釉	灰色	ロクロ、ケズリ 輪中段まで たれる。	"	"	-
25	1J出	須恵器	四耳壺	20.2	-	-	暗灰色	暗灰色	ロクロ・ナデ	還元炎	"	2/5



第17図 1号住出土遺物拓影図

第2表 飯綱平遺跡1号住出土土器観察表(拓影図分)

番号	器種	器形	色調		成型・調整	形態の特徴	その他
			内	外			
1	土師器	-	暗橙色	暗橙色	ロクロ・タタキ	-	時期不明
2	縄文中期土器?	深鉢	#	#	-	-	観察不能
3	土師器	甕	明橙色	明橙色	ロクロ・ケズリ	長胴甕?	
4	須恵器	#	青灰色	青灰色	ロクロ・ハケ	-	
5	#	#	#	#	ロクロ・ナデ	-	8・9と同体
6	#	#	#	#	ロクロ・タタキ	-	
7	#	#	#	#	タタキ・ナデ	-	
8	#	#	暗灰色	#	ロクロ・タタキ・ナデ	-	5・9と同体
9	#	#	#	白灰色	タタキ・ナデ	-	5・8と同体
10	灰釉	壺	暗灰色	綠灰色	ロクロ・釉	長頸壺・肩部 実測径24同体	

第3表 石製品・鉄製品計測表(第18図)

番号	種別	材質	長径	短径	厚さ	観察など
1	やりかんな	鉄	(9.5cm)	1.6cm	0.3cm	柄部僅か欠損
2	-	燧石	7cm	(6.5cm)	(6cm)	ほぼ球形半欠
3	大型蛤刀磨製石斧	石英閃緑岩	(14.7cm)	6cm	4.5cm	復原長さ18cm

が、転換点にみられる凹線はこの退化した姿を示すとみられるから、後出的である。

思うにこの四耳甕は、水利に乏しい高台にあって、水の運搬と貯蔵に使用されたものと、推定

される。

坏（第15図1・2）は2種あって、1は土師器の坏と共通した成型を示し、焼成が異なるだけである。ロクロ成型されて、器壁に凸凹がみられ、糸切り痕も明瞭である。

2は器壁が外反りした器形で、ロクロ成型され、糸切り痕も消されて箱形の付高台が付着されている。器肉は堅くセピア色している。

甕（第17図4～9）は4個体分検出されている。このうち7を除いて器肉が厚く、貯蔵用の大甕である。内面は4には板状工具の平行線がみられるほか、打痕をすり消している。

器肉は4個体ともセピア色して、堅く焼成されている。

3 灰釉陶器（第15図22・16図24・17図10）2個体検出されている。碗と長頸壺の破片である。碗は口縁端部の外反りは弱く、高台は一体化として作られ、先が尖っている。釉は内面の底まで、外面は下1/4を残して塗られている。

これは猿投窯黒帯89号窯製品に類似している。

長頸壺と推定される破片は、第16図24が下半部で、外面下部は削られており、上はよく成型されて釉がかけられている。内部もロクロなでされた痕が明瞭である。高台は後に付着されたものと見られる。

同体と思われる破片は、第17図10で示した肩部破片で、表面は釉が厚くかけられ、緑色した部分がある。内面はロクロなでされている。

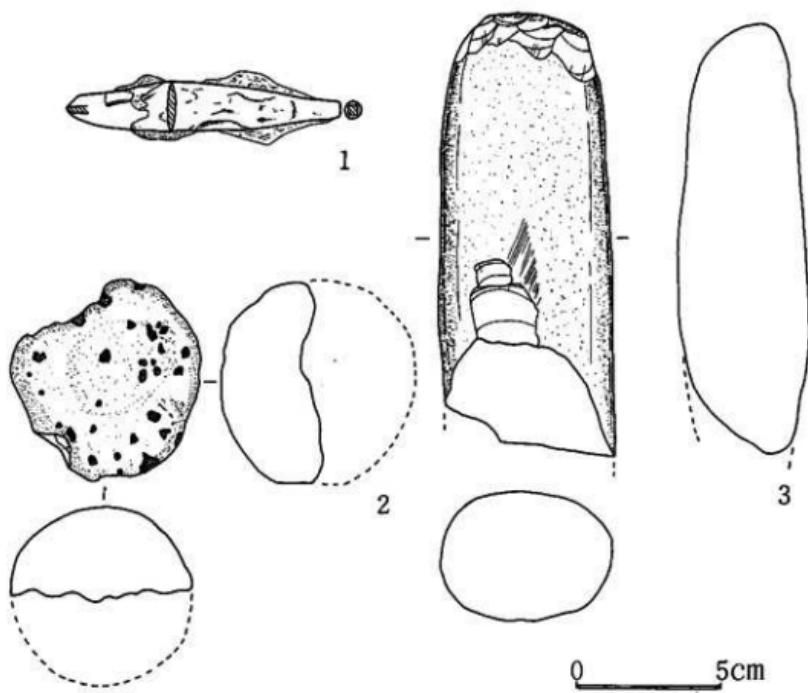
4 石製品 磨製石斧（第18図3）は太形蛤刃石斧とよばれるもので、1号住居址から検出されたもので、ここからは他の弥生時代中期の遺物の出土はみられない。

石英閃綠岩でつくられ、残存長さ約15cm、幅6cm、厚さ4.2cmを測り、復元長さは18cmと推定される。頭部に敲打痕が顕著に残り、刃部は使用時の衝撃のためか、斜めに欠損している。

弥生時代前・中期に、この地方の遺跡にみられる通有品で、伐採・割斧に使用されたものである。しかしこの住居址は平安時代に属し、石斧としての使用は考えにくい。握りのよさから他から拾得などして、敲打用に使用されたものと思われる。

軽石（第18図2）は1号住居址の検出である。約半分欠けている。表皮が摩滅し、使用されていたことがわかる。浅間山産のものが千曲川で、拾得できる例がある。或いは漁労（うき）、皮革（なめし）、美容（垢とり）などに、使用されたと考えられる。

5 鉄製品 やりかんな（第18図1）も1号住居址の検出である。さびのためよく観察できないが、刃部の長さ約7cm、最大幅1.7cm、厚さ0.3cmと計測される。柄の部分は断面四角で、一辺0.4cmを測り、欠損している。やりかんなとして、けずりに使用されたものであろう。



第18图 1号住出土遗物实测图

## 第IV章 考 察

### 第一節 1号住出土の土器について

1号住居址からは、今までみてきたように、弥生時代から伝統の土師器（はじき）の壺・甕・黒色土器と、古墳時代からみられる須恵器（すえき）の壺・甕・四耳壺と、平安時代から作られた、草木の灰を釉薬（うわぐすり）にした灰釉の碗・長頸壺が検出され、平安時代の土器が、一応揃っている。食器具の土師器壺（皿・椀）は、ロクロ成型され、同じくロクロ成型された黒色土器とは、7:1の割合で存在し、破片数でも7.75:1の割合で、ほぼ一致し、黒色土器は劣勢である（第4・5表）。

須恵器の食器具の壺は、土師器の壺に比較して、少数派である。甕・壺も多くはない。

灰釉の碗と長頸壺は、1個体づつの検出である。このころは、岐阜県の光ヶ丘1号窯をはじめ、大原2号窯なども操業し、長野県では、より近くから灰釉陶器が入手できるようになった。しかしこの北信地方では、器種構成の数量からみても、貴重品であった。

このように食器具の土師器壺の多量、黒色土器の少量、須恵器の食器具壺の少量、貯蔵具の甕・壺の少量が指摘される。しかし灰釉は、地理的関係から保有量は少ないが、この時期は、この地方では、保有が一般的でなかったとみられる。

このようにこの住居址は、この遺跡における、中心的な存在ではなかったかと指摘できる。そして、この住居址の営まれたのは、遺物の年代からみて、平安時代V期、10世紀前半の終わりに近いころと推定したい。

### 第二節 ま と め

今回の飯綱平遺跡の住宅団地造成に伴う、緊急発掘調査において、旧石器・縄文・弥生の遺物も皆無とはいえないかった。まだ多くの未調査区を残しているので、当初の予想と反した調査結果であったが、将来の調査にまちたい。

第4表 飯綱平遺跡1号住出土の土器構成

器種	土 师 器				須 惠 器				灰 釉	
	壺	甕	黒色土器	甕	壺	甕	四耳壺	甕	長頸壺	
数	4	10	4(3)	3	2(1)	4	1	1	1	

実測図・移影図合計( )は右付

第5表 飯綱平遺跡1号住出土の器形別土器破片数

器形	壺(皿・椀)	黒色土器(甕)	甕
数量	93	12	24

今回は、住居址3、焼石土坑1などの検出にとどまったが、遺構・遺物の面から注目されるのは、1号住居址だけである。この住居址の年代は、10世紀後半の終わりころと推定した。

8世紀はじめには、郡司層などによって、善光寺が創建され、その半ばころには、上田市の信濃国分寺もつくられた。この世紀末ころにはこの地方でも、一般に糸切り（ロクロ使用）の环が使用された。また、各地に寺院（私寺）が建立されるようになった。794年（延暦13）には、新しい都を平安京と命名し、平安時代となった。

6世紀後半に開拓した、中野市高丘丘陵の須恵窯も操業をつづけ、各地に製品を供給していた。1号住居址出土例でいえば、立ヶ花表山窯址出土品が該当しよう。さらに9世紀第I四半期には、信濃でも灰釉陶器・綠釉陶器がもちいられるようになった。

また後の『延喜式』によれば、このころ信濃には、御牧が16牧あり、耕地化されない原野が広がっていた。この世紀のなかばには、黒色土器が食膳具として多用されている。

この黒色土器は中野市大俣の宮反遺跡からも検出され、「全」または「金」と墨書きされたものがあり、豊田村替佐の川久保遺跡からも「七年□」と書かれたものが発見されている。

10世紀にはいると、信濃でも各地の靈山の麓に、真言密教寺院が建立されている。927年（延長5）左大臣藤原朝臣忠平が『延喜式』50卷を進呈し、937年（承平7）ころには、源順が『倭名類聚抄』を編纂し、水内郡には8郷が記載されている。しかし長野市周辺に比定地が多く、下水内郡には、明確に該当する郷名は、指摘されていない、今後の研究課題とされている。

938年（天慶1）平将門が平貞盛を追って、小県郡国分寺周辺で戦い、貞盛方の他田真樹が敗死した。信濃武士の登場である。莊園制の拡大、御牧の貢馬の遅延など、律令制の弛緩がめだつてくるところである。

この1号住居址は、この時代背景のもとに、存在したのである。

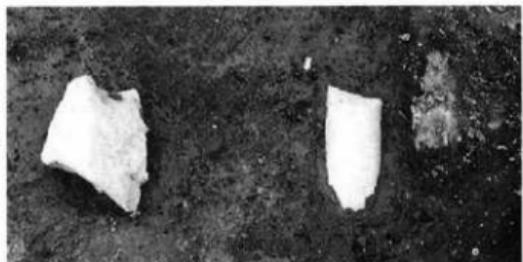
今回の調査にあたり、県教委・豊田村教委・企業界の諸氏より、多大な御配意を賜り、作業員など多くの方々からご支援、ご指導を賜った。厚く感謝申しあげます。（檀原長則）

#### 引用・参考文献

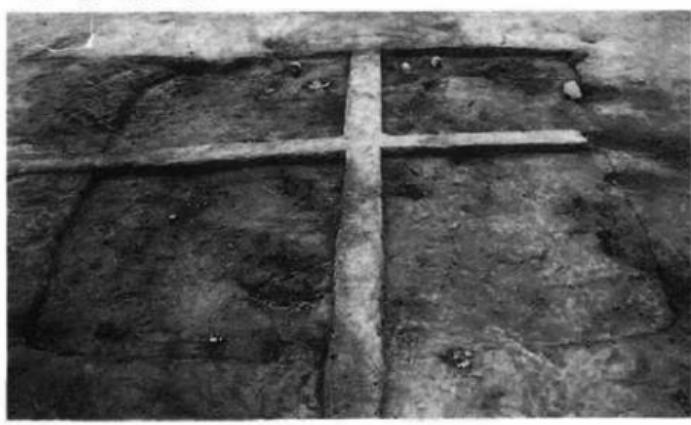
- 豊田村誌刊行会　　『豊田村誌』　1963  
中野市誌編纂委員会　『中野市誌』自然編　1981  
長野県　　『長野県史』考古資料編・遺跡地名表　1981  
長野県　　『長野県史』考古資料編・遺構・遺物　1988  
　　　　　『角川日本地名大辞典』　1990  
中野市教委　　『宮反』遺跡緊急発掘調査報告書　1985  
宮沢（高橋）桂　　『北信濃川久保出土の墨書き土器』『信濃』III10-12　1958



↑ 1 北から遺跡を望む



→ 2 太型蛤刃石斧の出土



↓ 3 北から見た 1 号住

図版

→4 1号住  
東の土器

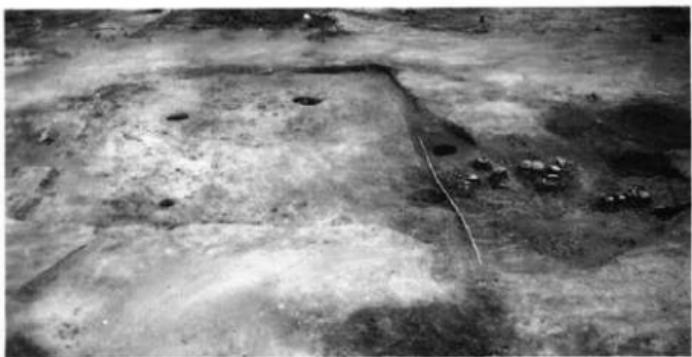


←5 やりか  
んなの出土



→6 南から  
見た1号住





↑ 7 南から見た 1 号住



↑ 8 南から見た 2 号住



↑ 9 南から見た 3 号住



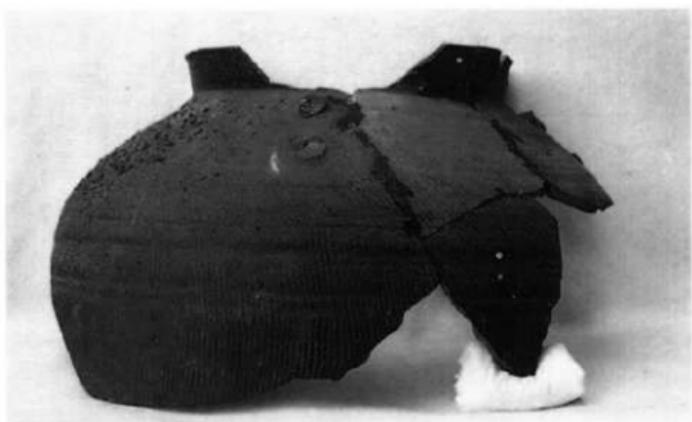
↑10 北から見た 3号住



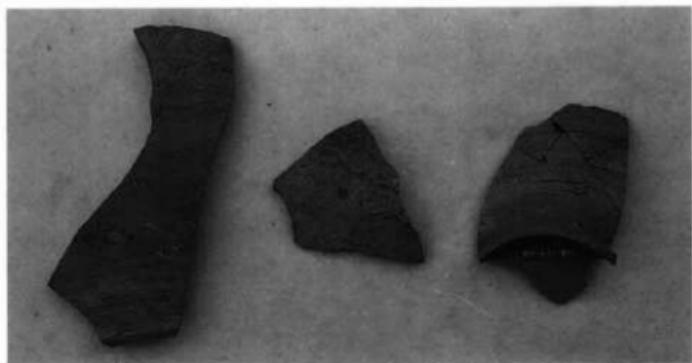
→11 南から見た 3号住のが



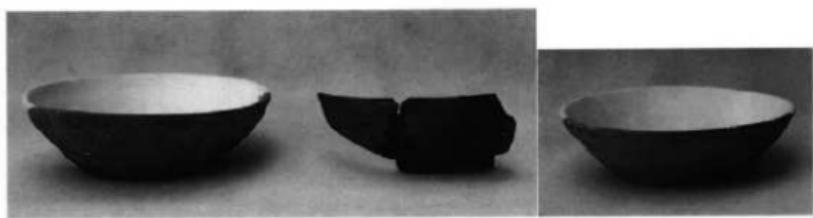
←12 南から見た  
焼石土坑



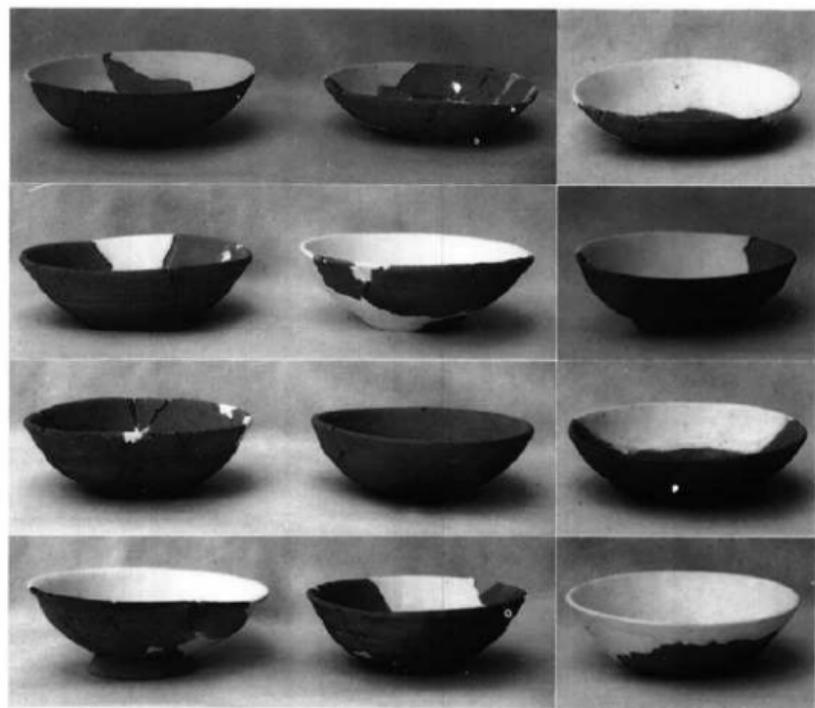
↑13 1号住出土須恵器四耳壺



↑14 同 灰釉長頸壺・碗破片



↑15 同 須恵器環・高台付環・未完了焼成環



↑→16 1号住出土土師器環



↑17 同 大型蛤刃石斧



↑18 同 やりかんな



↑19 同 軽石製品



† 20 発掘調査風景



† 21 南から見た 5 号調査地点

---

---

## 飯綱平遺跡

——発掘調査報告書——

---

平成6年3月20日 印刷

平成6年3月30日 発行

編集発行 長野県下水内郡豊田村大字豊津395-1  
豊田村教育委員会

印刷 ほおづき書籍株式会社

---

---

